1-⑤ 人間とは本当は何であるか

<人間とは本当は何であるか>(P30~✔)

まず出発に当って、われわれは多くの人々の実際の状況を見なければならない。彼らの外観をそのまま現実の姿と見てはいけない。彼らを理想像、すなわちこうあるべきものと見てはならない。

人は分裂した自分自身に苦しむ。人々とのつき合いや財産などに安定を求め、同時にそれらの空しさを感じとっている。人は自分自身を発見したいという熾烈(しれつ)な衝動にかられている。だが同時に自己観察が露わに

なによりも、彼はひくついている。ひどい不安に陥っている。彼の苛立ちは彼を放っておかない。

彼は、どうにもならず悶(もだ)え苦しみ、せめてこの内的な危機を、一時的にせよ、とり押さえてくれないかと、縋(すが)りたい気持で刺激を求める。だが彼はこの内的不安との戦いには絶対に勝てない。遅かれ早かれ、

医師のオフィスへ向かう途中の患者を想像してみよう。彼は途々、ちょっと興味を惹かれる光景を立ち止まって眺め、また新聞を買って見出しの文字に眼をやり、ぐずぐず時間を潰している。そのうちに、他愛のない気散じ

人間が本来の全体性を求める姿はおおむねこのようなものである。われわれはスリルに気を紛らわし、衝動的な欲望に身を委せ、誤った原則に眩惑(げんわく)される。だが、いちばん強力な麻薬は、おれは万事これでうま

これを大いなる変化という。それはどんなにして始まるか?

これまで考えていたものとはまったく違うなにかがあるという覚醒の最初の火花が、あなたの人生の転機となる。以前は、あなたのありきたりの生き方を超えた、あるものなどには気づかなかったし、目もくれなかった。心

閃きはほんの一瞬で、あとは続かない。あなたはすぐに再び眠ってしまう。もう一度との火花が現われるまでには一週間、一ヵ月、いや一年の歳月が過ぎていよう。しかし二度目の火花が散るのにどんなに長くかかるかなど

意識が戻れば、もはやなにものも以前のとおりではない。あなたはリアリティに掴まえられたのである。あなたは前へ動きだしたのだ。この径を振り返ると、それは新しいショック群、深い困惑、新鮮な驚異、うれしい啓示

ラルフ・ウォルドゥ・エマソンが書いているー

魂が真理と通じあうという事態は自然界における至高の出来事である・・・・・・このコミュニケーションは神の心がわれわれの心のなかへ流れこんできたということだ●●●・・・個人がこの浸透を感じる瞬間はどれも

この大いなる変化に至るまでに、なんと長いこと古びた不満足な生き方をしてきたことよ、と嘆くことはない。要は、暗い部屋に電灯のスイッチを入れさえすればいいのだ、暗い時間がどんなに長かろうと構わない。とにか

Revision #5
Created 15 October 2024 05:10:05 by ゆう
Updated 13 November 2024 15:22:12 by ゆう